

【2020年10月10日発行】

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニューズレター46号

<http://jsics.org/>

日本国際文化学会事務局

多摩大学  
グローバルスタディーズ学部事務室内  
〒252-0805  
神奈川県藤沢市円行802番地  
Tel: 0466-82-4141  
Fax: 0466-82-5070  
Email: [jsics@gr.tama.ac.jp](mailto:jsics@gr.tama.ac.jp)

## ごあいさつ

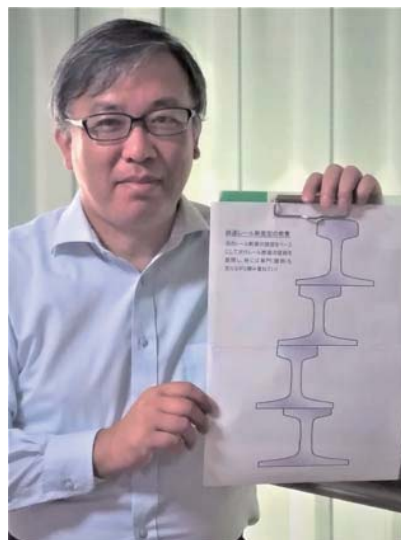
### 「グローバルな教養」はT字型ではなく

副会長 倉真一  
(宮崎公立大学)

書店を覗くと世間では「グローバルな教養」ブームが続いているようだ。大学入試情報でも「国際教養系」といった学部・学科の分類があるくらいで、当のブームに多少は便乗している身としては、これを真っ向否定することもできない。しかし、どうしても引っかかる点がある。それは、「グローバルな教養」が流動的で予測困難なグローバル社会に必要な「新しい」教養として自らを賞揚しながら、実は新しくない何かを内包していると感じるからだ。

具体的にはT字型(あるいは逆T字型)のアナロジーである。曰く、これからはジェネラリストの目を持ったスペシャリストが必要である。幅広い教養(T字の横)をベースに、専門を掘り下げる(T字の縦)。これが新しい教養(リベラルアーツ)の基本モデルと考えられている。しかし、このT字型モデルは流動的で予測困難なグローバル社会(Z.バウマンのいう「リキッド・モダニティ」)よりも、むしろ比較的安定して予測(計画)可能な前期近代(「ソリッド・モダニティ」)との適合性が高い。自己の専門の延長線上に安定した職業生活を予測できるなら、T字型モデルの妥当性は高いだろう。だが現在の新型コロナ禍をみるまでもなく、こうした想定 of 妥当性は今や相当に疑わしい。さらに、リキッド・モダニティにおいて教育の意味がリストラされないよう自己の専門の最新知識を学び続けるものへと変容するなか、リベラルアーツとしての「学び続ける力」(池上彰)の奨励すら、生き残りのための能力へと容易に読み替えられてしまうだろう。

では改めてリキッド・モダニティを前提に、T字型モデルを書き換えてみるとどうだろう。ここでは「(鉄道)レール断面型」というアナロジーを考えてみたい。まず幅広い教養(レールの底部)、そこから自分の専門を高める(レールの括れた腹部)、さらに専門を核にしながらそこ



に知識の幅や厚みを加えていく(レールの頭部)という型である。特にレール断面の頭部は、他分野の知見との関連性を新たに見出す、以前に学んだ教養的知識を当初とは違った視点から理解しなおすといったイメージで捉えるとわかりやすいかもしれない。そこでの学びは、多様な結びつける技法に支えられている。

これを基本に、流動的なリキッド・モダニティの状況と自分の興味関心の変化にともなって、元のレール断面の頭部を下敷きに次のレール断面の底部を展開し、時には自分の専門(腹部)の軸をずらしながら、いくつもレール断面型の学びを積み重ねていくこと。こうしたレール断面型の学びの積み重ねとして、「学ぶ続ける力」を再定義することもできるだろう。最後に、国際文化学はグローバル社会を対象に、そこでの文化と文化の多様な結びつきを重視する視座において、ここで提案(妄想)してみたレール断面型の学びと相性が良さそうに思うのだがどうであろうか。

【次期全国大会】 会場:近畿大学 日程: 2021年7月10日(土)~11日(月) ※9日(金)にエクスカージョン予定  
●発表の応募をお待ちしています。《締切》 共通論題:2020年12月末 自由論題:2021年3月末

## 第19回全国大会を終えて

第19回全国大会 実行委員長 高橋 梓  
(近畿大学)

第19回全国大会実行委員会は「個別主義の壁、普遍主義の壁——2020年代を切り開く〈ことば〉」というテーマのもと、近畿大学での大会開催に向けて入念な準備を進めておりました。しかしながら、我々の計画は新型コロナウイルスの感染拡大状況を考慮し、大きく変更せざるを得ませんでした。そこで我々はすでに実行委員会宛に寄せられていた自由論題・共通論題を主軸に、第19回全国大会を「書面開催」という形で行うことを決定することとなりました。

書面開催では、11本の自由論題と2本の共通論題が会員全員に公開されました。自由論題は通常開催時と同様に、内容ごとに分類し、五つの分科会に分かれました。詳しくは各分科会の司会者の報告をお読みいただければと思いますが、特殊な形態でありながらも非常に示唆に富む大会でした。

本大会を経て改めて気づいたのは「文章」の重要さです。書面という特性は、主張や論理の曖昧さを露わにするため、精緻な論理を要求します。すべての報告を熟読し、その一つ一つに緻密さや革新性が反映していることを実感いたしました。それゆえ議論は極めてハイレベルなものになったと思います。本大会では、報告者と専門性の近い会員に討論者を依頼しましたが、大会開催期間中は非常に充実した議論が展開されました。また専門外の会員から本質的な指摘がなされているものもあり、本学会の特徴の一つである学際性も際立ったと

思います。

9月1日をもって全国大会は終了いたしました。専用サイトに残された報告者・討論者・会員の議論はどれも示唆に富むものです。当学会の貴重な資産として、本大会の議論をアーカイブ化することを強く望みます。

さて、様々な可能性を感じ取ることができた「書面開催」ですが、むろん良い側面だけではありません。書面による精緻な議論は、コメントする側にもある種の覚悟を要求します。そのためか、全体の質問数はさほど多くありませんでした。書面＝文章の重要性が示された一方で、会員と一堂に集い、忌憚のない意見を述べあう従来の大会方式がいかに意義深いものであったか、改めて実感いたします。

また、書面開催が終了した一方で、残念ながら次回大会に延期せざるを得なかった報告も少なくありません。海外での調査が困難となり、資料へのアクセスができず……といった深刻な事情でやむなく報告を延期することとなった方々の気持ちを推察すると、非常に心苦しく思います。

我々実行委員会は、書面開催を以て解体することなく、2021年度に改めて近畿大学にて全国大会を行うことを目指して運営を続けて参ります。先の読めない状況の中、様々な困難に見舞われ、その都度ご心配をおかけするとは思いますが、会員の皆様におかれましてはぜひご協力を賜りますよう、改めてお願い申し上げます。

## 共通論題A 「東南アジアの映画は家族をどう描いてきたか」

代表：山本博之(京都大学)、西芳実(京都大学)、平松秀樹(京都大学)

討論者：青木恵理子(龍谷大学)

アジア諸国において、経済成長、民主化、グローバル化の進展は、中間層の拡大とともに、個人の自由を重視する価値観や西洋近代的な価値観の大衆化をもたらした。この結果として、伝統的な価値観と個人主義の相克や宗教の活性化などの反応が入り混じりながら、社会の中で多様な価値観のせめぎ合いが生じている。このせめぎ合いはとりわけ家族に顕著にあらわれている。

本共通論題では家族をめぐる規範や価値観を見る方法の1つとして映画を取り上げた。映画は、新しい価値観や世界観を提示して社会を先導しようとする先鋭

的な側面を持つ一方で、観客が劇場に足を運び鑑賞料を支払って観覧することで興行として成立する側面も持つ。とくに後者の理由により映画(とりわけ商業映画)は社会のニーズや欲望を念頭に置いて制作されることから、映画は社会のニーズや欲望を読み取る素材になりうる。

本共通論題では、映画が国民的な娯楽の地位を占める国のうち、宗教が社会の重要な要素となっているとともに西洋近代的な生活様式も取り入れられている東南アジアのフィリピン、インドネシア、タイを事例として、それぞれの国で制作・公開された映画に描かれる家族像を分

析した。

はじめに山本博之(京都大学)が「フィリピン映画に描かれる家族のかたち」を報告した。海外出稼ぎ労働者の多さで知られるフィリピンでは、母親の不在による家族の紐帯の危機が主要な問題の1つとなっている。フィリピン映画に描かれる海外出稼ぎ労働者とその家族の物語を通じてフィリピンにおける幸福のあり方と家族の関係について議論した。

次に西芳実(京都大学)が「映画が映すインドネシアの家族像」を報告した。家族主義により権威主義体制が正当化されてきたインドネシアでは、1998年の民主化後、「強く正しい父親」にかわる父親像が模索されている。インドネシア映画に見られる父親像を通じて、インドネシア社会が父親と子の関係をどのように捉え直そうとしているかを議論した。

最後に平松秀樹(京都大学)が「タイ映画に見る親子の関係」を報告した。報恩の価値観が社会の基底にあるタイでは、親の意に沿わない恋愛・結婚や同性愛を親不孝とする根強い考え方がある。タイ映画に見られる家族の物語を通じて、親不孝になることを避けながらも人生のパートナー選択の自由を模索してきた現代タイ社会の試みを読み解いた。

これらの報告に対し、討論者の青木恵理子(龍谷大学)から、国ごとの映画の特殊性を東南アジアの中のダイナミックな関係に関連付ける観点および各国内の映画を巡る様々な様相のダイナミズムの可視化という観点からコメントが行われた。

このほかに2名の会員から質問とコメントがあり、報告者からそれぞれの事例を踏まえた応答がなされるとともに、映画を用いた社会の研究の方法についての議論が行われた。

## 共通論題B 国際文化学の方法としてのスタディツアー —「知識」から「現実感を伴った知性」への転換のために—

代表:坂口可奈(北海商科大学)、藤田賀久(多摩大学)、鄭文琪(多摩大学)、  
谷口天祥(神奈川県藤沢翔陵高校) 討論者:井出晃憲(稚内北星学園大学)

本共通論題は、国際文化学の方法としてのスタディツアーを確立するための議論を喚起するものであった。各報告者の問題意識と課題とともに、報告者たちが行った大学生・高校生の「現実感を伴った知性」を涵養するための工夫が紹介された。

第一報告(坂口可奈)「スタディツアーの定義とフレームワーク」は、国際文化学の方法としてのスタディツアーの理論的枠組みの構築を試みた。先行研究を振り返り、国際文化学の方法としてのスタディツアーの意義を明らかにしたうえで、「現実感を伴った知性」を涵養するためのスタディツアーの定義とフレームワークを提示した。

第二報告(藤田賀久)「スタディツアーの意義と可能性——何をテーマに設定するか」では、引率者(スタディツアーの企画者)としての立場から、スタディツアーの目的である「自己と他者を繋ぐ」ということの難しさと可能性を、台湾スタディツアーを例にして報告した。

第三報告(鄭文琪)「大学が持つスタディツアーの可能性——地域の国際交流の拠点化に向けた挑戦」では、スタディツアーが「地域と世界」が繋がっていることを学生に体感させる手段であることを提示した。ここでは、従来の「大学—海外」という構図に加えて、「地域と大学」の関係を密にし、大学が地域と世界を繋ぐ結節点となり、その「繋ぐ」役割に学生を参画させる方法を探求している。

第四報告(谷口天祥)「高等学校におけるスタディツアーの実践例——生徒に何を考えさせるか、生徒は何を感じたか」では、高校の修学旅行を通じて、社会に向けて生徒達の目を拓かせ、さらに「人間とはなにか」「学ぶとは何か」「社会とは何か」といった問題意識までも涵養しようとの試みを報告した。

討論者の井出からは、本セッションを貫くキーワードとして「タンジブル」という語がふさわしいとの指摘とともに、移動と交流が「現実感を伴った知性」を涵養する他事例の紹介も行われた。また、スタディツアーの歴史的系譜、異文化理解におけるスタディツアーの効果、「繋がり」に関する将来の展望、修学旅行の歴史に関する問いが提示された。フロアからは、スタディツアーにおいて「異」や「他」と接触した際の参加者のネガティブな反応やホスト側の変容についての質問がなされた。

本セッションの報告者たち(と討論者)は、異文化理解や多文化共生、文化摩擦への対処には体験や実感が不可欠であると考えている。しかし、世界を襲ったコロナウイルスにより、体験や実感そのものが困難な状況となっている。だからこそ、五感を駆使して学ぶ教育方法としてのスタディツアーの意義と方法論を改めて見つめ直すべきであろう。今後も広く議論していきたい。



## 自由論題A コミュニケーションのなかの文化

司会：岩野雅子(山口県立大学)

発表：相原征代(北陸大学) Dennis Harmon II(北陸大学) 増淵佑亮(東北大学院)

‘Japan’s sontaku culture as a prism of other-orientated self among Japanese University students’ (発表者：Masayo Aihara会員, Dennis Harmon II会員)は、日本の「忖度(ソントク)」文化を取り上げ、日本人大学生の調査をもとに、他人の目や意見を気にして自らの選択や判断を行いがちな他者志向あるいは他者依存ともいえる傾向と関連づけ(空気を読む/reading between lines)、「忖度(sontaku)」の果たす機能と結果についての分析を行っている。忖度をexplicit sontaku(明示的ソントク)とimplicit sontaku(暗示的ソントク)に分け、前者はわたくしたちの選択肢そのものに影響を与え、後者はわたくしたちが選択をする際の意識や欲望といったものに影響を与えたとした上で、自ら望んだと思いついて入っているものが実は暗示的ソントクによって形成されたものであることを、大学生の「グローバル人間」志向や「英語を話せるようになりたい」志向を事例に説明しようと試みている。これに対し、討論者(Amy Wilson会員)はまず、ソントクをしているということ自体を大学生が意識しているのか、無意識のうちにあるのかという点について問いを投げかけ、次に、ソントクが空気を読むという行為と異なる点は、前者にはより上下関係や力関係がかかわっていることを指摘し、親や教師や社会からの期待を読む傾向は日本文化だけに見られるものではなく普遍性があるのではないかと、また、大学生が暗示的ソントクをするような情報源(親や大人や社会)に対してさらに暗示的な圧力を与えるものは何かと問っている。発表者は、どの社会にも人々が多様にもちえる選択肢や希望、欲望、願望といったものを排除し、妨害し、特定の方向に導くものがあり、それが日本では例えばソントク文化にみられるが、他の文化圏についても研究を広げたいとしている。今後は、できれば留学経験のない者・3か月未満の短期留学経験者・1年以上の長期留学者、オンラインやバーチャル留学者間等でのデータの比較

や、受け入れ留学生のデータとの比較、さらには、オンラインとオフラインとの間を行き来する現代人の意識の解明など、研究の深化に期待したい。発表者がタイトルで使用した「prism」が何を意味するのかは、今後の研究によると思われる。

「言語表現の理解に関わる文化の知識に関する考察」(発表者：増淵佑亮会員)は、特定の文化の中で変化していき、また、新しく生成されていく言語表現について、英語の名詞転換動詞と日本語の非動名詞+する表現を取り上げ、その文化に触れたことがある人とない人との間で理解や使用の際にどのような違いが生じてくるかについて丁寧に論じている。討論者(黒沢宏和会員)のコメントにもあるように、なかでも所属文化/経験文化、使用者/解釈者/創造者といった定義を行い、文化に関する知識や体験の有無だけでなく、言語に付加された意味の予測や理解について3つのパターンを使って解説を試み、「文化共有」という視点からの説明を試みている。質問者(高橋梓会員、山川清太郎会員)との質疑応答では、使用者・解釈者間で文化共有があり理解されていると思われている事例の中にも認識の差(ズレ)が出てくる点をどう説明するか、また、認識のズレがあっても意思疎通ができる言語フレームとの関係性、さらには多言語話者間での文化的要素の考え方など、今後の研究に示唆を与えていただいた。発表者も最後に述べているように、今後さらに仮説の検証がなされ、具体的なデータをもってさらにパターン化の説明が精査されていくことが期待される。グローバル化や情報化、多言語化が進む今日、国や地域間、世代間、メディア等の発達による仮想空間と現実生活との間において、言語の生成や創造、解釈、使用における理解や認識に関する課題を論じることがますます重要になってきている。討論者のコメントにあるように、文化要素の知識が必要な語の解釈可能性についての研究が深化されるよう期待したい。

## 自由論題B ナショナルな記憶と表象

司会：川村陶子(成蹊大学) 発表：稲木徹(安徽大学) 阿部碧(一橋大学大学院)

本セッションでは稲木徹会員(安徽大学)による『『表現の不自由展・その後』における天皇をめぐる表現と文化間対話』、阿部碧会員(一橋大学大学院)による「戦争証跡博物館から探る『アメリカ市民』による焼身行為の記憶」の2つの報告が行われた。いずれの報告も展示に題材をとっており、討論者は静岡文化芸術大学から中村美帆会員と岡田建志会員がそれぞれ務めた。

稲木報告は、あいちトリエンナーレの企画展で展示された大浦信行の作品をめぐる行われた論争について、それを表現の自由と宗教(ないし、国家の象徴)という異なる価値の相克ととらえ、国際機関における「文化間対話」の事例も援用しつつ、作品にかかわる人びとの間で「対話する文化」が形づくられる可能性を検討し

た。中村会員は、「文化間対話」が作品鑑賞の場で進められる可能性を示唆しつつ、本報告の最大の意義は国際法を専門とする稲木会員が「国内多数派の議論との適度な距離」を保ち、作品への「否定的反応の理論化」につながる視点を提示したことにあると指摘した。これに対して報告者は、あいちトリエンナーレをめぐる裁判の直近の展開もふまえ、「文化間対話」の問題をさらに追究したいとの立場を示した。また、欧州人権裁判所の判例やスペイン国王の憲法的位置づけなどとの比較も加え、今後の研究に向けた論点を整理した。報告者と討論者は、2011年の当学会共通論題で文化間対話をテーマに発表している(『インターカルチュラル』第9号小特集参照)。当時のセッションに参加した司会者には、約10年を

経てそれぞれの研究を深化させた両会員の真摯な討論もまた感慨深かった。

阿部報告は、ベトナムのホーチミン戦争証跡博物館の反戦運動に関する展示において、1965年に焼身行為をした複数名の「アメリカ市民」がどのように表象されているかを、同博物館の「社会主義国家のイデオロギー装置としての役割」という観点から検討した。岡田会員は、本研究がベトナム・アメリカ両国間における焼身行為と戦争の「記憶」の相互連関を論証できれば、インターカルチュラルリティに関する考察として意義をもつものになると評価した。そのうえで、両国における戦争反対の焼身行為の受容や戦争証跡博物館のイデオロギ

### 自由論題C 近代中国の宗教と文学にみる日本

司会：菅野敦志(名桜大学) 発表：韋傑(龍谷大学院)

本セッションでは「近代中国の宗教と文学にみる日本」をテーマとして2つの報告がなされた。

第1報告は、韋傑会員(龍谷大学大学院生)「民国期における密教復興運動について」であった。同報告では、近代中国(中華民国期)の密教復興運動を草創期、全盛期、衰退期の三期に分類し、中国密教者の思想や主張の変遷のなかに、日中関係および真言宗とのかかわりが確認できる点を中心に検証がなされた。結論として、密教復興運動は中国仏教の改革を目指した僧・太虚の思惑通りには進展しなかったものの、現代の中国仏教のなかには日本からの影響を含む諸要素がいまだに見受けられることから、それらが中国仏教と融合しながら独自の発展を遂げてきた点が指摘された。

討論者の鈴木隆泰会員(山口県立大学)からは、①「『仏教学的アプローチ』が主流となる中で、当時の政治、文化的環境などに代表される社会背景を考慮に入れたことが、『国際文化学』の学会発表に相応しくした点、②従来の研究の多くは中国語文献に依拠していたが、本報告では日本語文献も用いられたことで、「釈持松に対する新たな見識を提示」できた点が高く評価された。

第2報告は、曾小蘭会員(東北大学大学院生)「私小説におけるプロレタリア文学の位相—郭沫若と郁達夫との比較を中心に—」であった。同報告では、ともに日本へ留学し、日本との深いかかわりを有した郭沫若と郁達

### 自由論題D イスラーム社会とマイノリティ

司会：小川忠(跡見学園女子大学) 発表：市川卓(法政大学院) 松井真之介(神戸大学)

「イスラーム社会とマイノリティ」と題する本セッションの第一報告は、市岡卓会員による「シンガポールにおけるイスラームからの棄教者の社会的包摂をめぐる課題について」であった。多民族国家シンガポールにおいてイスラームからの棄教者が直面する困難、対応、課題について、当事者へのインタビュー等に基づき、社会的包摂・排除の観点から市岡会員は論じた。

シンガポールは公的制度としてイスラームからの棄教を認めているが、実際には棄教者に対する社会的差別はあり、差別を恐れて棄教した事実を隠し通す実態が存在する。保守派イスラーム指導者が棄教を罪と断じ、

一性を史料に基づき検証する必要性、展示におけるベトナムの共産党関係者の声明をより精緻に分析することの重要性などを提起した。報告者からは討論者のコメントに感謝するとともに、指摘を真摯に受け止め、今後新たな映像・文献資料やインタビューなども用いつつ、さらに分析を深めていきたいとのレスポンスがあった。

2つの報告は、いずれも展示にあらわれた文化と政治、記憶の問題を扱っており、パネル全体で報告者や討論者の相互コメントを促せばさらに刺激的な議論が展開できたと考える。司会者の不手際をお詫びするとともに、報告者のご研究のさらなる進展をお祈りしたい。

曾小蘭(東北大学院)

夫の2人を取りあげ、両者が1928年までに著した「私小説」を題材として、それぞれの革命文学への転向および認識の差異について、「自我」、「国家」、「社会」の三つのキーワードを用いた検討がなされた。その結果、郭ほどの困窮状態に達していなかったことが、郁に無産階級との距離を生じさせ、最終的に革命文学者として認められるに至らなかった点が指摘された。

討論者の齊藤泰治会員(早稲田大学)からは、報告者の「先行研究で不足している部分において知見を加えようとする貴重な努力」が評価されたうえで、①郭沫若の革命文学観、②郭沫若が「無産派と有産派の対立」と判断した根拠、③無産階級文学に対する郁達夫の見解、④郁達夫の革命文学に対する評価、⑤郭沫若が「『国家』に対する反抗を打ち出した」と判断した根拠、⑥郁達夫にとっての国家のイメージなどについて、多岐にわたる質問がなされた。

両報告は、宗教と文学という、異なる分野のなかに見ることのできる近代中国と日本とのつながりを軸に考察する点で共通していた。初の書面開催による報告であったが、議論のための時間がしっかりと確保される書面開催では、より核心に迫る質問が討論者やフロアから寄せられた感があった。今後も日中間の文化運搬者たる若手研究者が、新たな視座から既存の枠組みを超えるような研究を進められることを期待したい。

家族からの絶縁、学校でのいじめ、職場での嫌がらせ等を恐れて、棄教を隠す中で、棄教者は強い精神的負担、疎外感を背負って生きている。市岡氏はインタビューを通じて彼らが抱えるスティグマをあぶり出し、そういう困難を抱える人々が結びついて作られたネットワークCEMSG(Council of Ex-Muslims of Singapore)の活動を紹介している。CEMSGは公開制フェイスブック・グループで、棄教をめぐる動向共有、意見発信、実用的な情報提供等を行い、棄教者が安心できる「居場所」を提供している。

東南アジアのイスラーム棄教者に関する先行研究は



ほとんど存在しておらず、本報告は先駆的価値をもつものといえる。坂口可奈会員のコメント通り、CEMSGのような当事者団体の「ビズブルさ」が、棄教者排除をかえって強化する可能性があることを指摘した点も、本報告の重要な論点である。今後は、排除する側に焦点をあてた分析や、LGBT等他のマイノリティ・ネットワークとの比較分析研究を期待したい。

第二の報告は、松井真之介会員の「ヒズメット運動による学校建設の役割と現状：ヨーロッパ諸国を例に」である。1980年代以降世界中で急増したヒズメット運動による学校建設を分析している。フランス、ベルギー、アルバニア、ジョージアのヒズメット系学校フィールド調査に基づく。

松井会員によれば、ヒズメット運動は、トルコ出身イスラム学者ギュレンの思想を支持する人々の「市民活動」的運動である。この思想の特徴は、寛容の精神、平和的共生、文明間・宗教間対話、非暴力、民主主義や科学知識など近代的価値に見合ったクラーン解釈である。

## 自由論題E 帝国・戦争・越境と東アジア

司会：飯森明子(早稲田大学) 発表：井出晃憲(稚内北星学園大学)、菅野敦志(名桜大学)、藤田賀久(多摩大学)

自由論題Eでは、20世紀前半の「帝国」、周縁地域あるいは「平和の祭典」オリンピックについて、国民や少数エスニシティの文化と政治をめぐる3報告を得た。

以下テーマの時系列順に、第1報告では、井出晃憲会員(稚内北星学園大学)から2016年大会に続き、戦前樺太をテーマに「雑誌『旅』から見る日本統治時代の樺太における観光—オタスの杜の先住民観光を中心に」の報告がなされた。戦前日本における観光発展に寄与した先駆的雑誌『旅』の記事分析をもとに、調査者、観光者、当事者の3つの視点の交錯を確認し、「旅」のヒトの移動や「未開」社会との比較行動から帝国の周縁においてナショナルな共同性が形成される過程を考察した。

1920年代から30年代、帝国周縁地域にあたる樺太は、満州とともに共産主義への壁として、さらなる「日本化」が叫ばれていた。司会者がかつて『旅』と同時期に刊行されていた北方地域紹介雑誌に、政府省庁の直接指導を受けないまでも、政府や軍に近い関係者が編集に関与した例を調査したことがある。台湾との比較や、当時の現地住民の心理についてコメントを得たが、政治的人脈や政策方針も含めた分析、当該地域を扱う類似誌との比較などにも今後の研究発展が待たれる。

第2報告、菅野敦志会員(名桜大学)の「1940年<東京オリンピック>返上をめぐる日中米関係」は、昨年大会に引き続き、日中戦争により幻となった東京オリンピックを取り上げる。1938年7月東京大会を開催返上決定の背景について、従来の日本の自主返上論または中国側外交工作による中止論をふまえ、オリンピックにおけるスポーツの非政治化を説く仲介当事者で米国IOC委員アベリー・ブランデーに焦点を当てる。オリンピック研究

ギュレンの思想に共鳴する人々によって、ヒズメット運動は自発的に始まった。このヒズメット運動において最大の柱となっているのが教育である。松井会員によればヒズメット運動の特徴は、「組織の総体がないこと」で、それぞれの団体が自律的に活動している。加藤恵美会員のコメント通り、ヨーロッパ各地で建設された学校が、それぞれの地域の要請に応じた教育を提供している、という松井会員の分析は興味深い。「移民子弟のエリートを生み出す教育」(フランス、ベルギー)、「地元密着型エリート私学」(アルバニア、ジョージア)、「言語教育におけるマイノリティ子弟の統合組織」(ジョージア国境地域)といった多様な機能を果たしているのである。

ギュレン系学校から日本の学校教育が学べることは、という高橋梓会員の問いに対する松井会員の回答は、「保護者立学校」という発想、設立ノウハウ、運用方法、というものだった。これから日本で海外からの移民子弟の増加が予想されるなか、「保護者立学校」の存在と設立方法が参考になる可能性に言及した点は、日本の文教政策の観点からも示唆に富む問題提起であった。

センター所蔵資料をもとに、IOC委員会のなかの「国家」や多国間関係と、「オリンピック文化」とを考察する。

第一次世界大戦直後から数々の日中外交交渉で活躍した中国の有能な国際派外交官王正廷が、IOC委員会でも活躍していた。司会者には、王の登場は日本にとって単なるスポーツにとどまる話ではなく、日本が国家至上主義とオリンピックをより結び付けることにつながったと思われた。コメントにもあるように、当時「オリンピック文化」はどれだけ各国に共有認識ができていたのだろうか。国際社会の政治の現実とオリンピック精神の理想との「ねじれ」が、戦後も今も続いていることはいうまでもない。

第3報告、藤田賀久会員(多摩大学)「台湾撤退後の大陳島民—その軌跡とアイデンティティー」も昨年にかけて、第二次世界大戦後の台湾の少数「住民」社会の形成・変容から、現代台湾の多様性と多層性を確認する。大陸沿岸島嶼部大陳島は、戦前日本の植民地ではなかったものの、第二次大戦後の国共内戦と冷戦下の台湾海峡危機により、全住民が国民党政府の台湾本島への移住を余儀なくされた。中国本土からの移住者、台湾本島住民など台湾本島中心の先行研究の枠を越え、本報告は大陳島元住民の政治姿勢とアイデンティティー形成、さらに子供らの行動分析から台湾政治の未来を見据えた新たな世代の登場を明らかにし、活発な書面討論となった。

東アジア関係を支える国の境界を越えた文化の諸問題は、上記3報告を得て、今後もいっそう研究が進むだろう。

受賞論文「浦上の『受難』と『復興』における文化の存続—キリスト教修道士・岩永富一郎の活動を中心に」  
(日本国際文化学会年報『インターカルチュラル』第18号(2020年)所収)



事務局より: 2020年9月29日、桐谷多恵子会員が学会事務局を訪れましたので、副賞を授与させていただきました。

私のように直接に文化を論じてこなかった研究者が「日本国際文化学会 平野健一郎賞」という名誉ある賞を頂いて良いものか、正直なところ随分と悩みました。賞をお受けすることを決めた理由は2点ございます。

一つは、「ヨゼフ様」こと岩永富一郎修道士の活動、及び「ヨゼフ様」を語り継いできた方々の熱意と文化実践が評価されて受け入れられたのだと理解し、賞を頂く事にいたしました。

論文の本文中にも書きましたが、この論文が成立したのは、彼を慕い、彼について語り続けた人たちの存在に他なりません。2003年に長崎で「復興」について聞き取り調査を始めて直ぐに「ヨゼフ様」の名前を何度も耳にしました。どのような方だったのか興味を抱きましたが、文字資料を調べても限られた文献しか辿り着けませんでした。そのような中で、本稿は「このままでは、自分たちにとって大事な歴史が消えてしまう」という切実な声を聞き、それに応えるために描きました。特に、深堀好敏さんに出会うことで「ヨゼフ様」についての探求が一気に進みました。深堀さんは何度も「ヨゼフ様なしに浦上の復興は語れない」と仰いました。文字資料が少ない中、深堀さんがカトリックコミュニティに働きかけてくださり、貴重な資料や聞き取り調査の機会を作ってくださいました。深堀様の存在なしにはヨゼフ様を描くことはできませんでした。何よりも、深堀さんのヨゼフ様への想いが私を動かす大きな原動力でありました。更に、深堀さんのご紹介で本山しのぶさんと知り合うことができ、ヨゼフ様に関する歴史が色鮮やかに甦るようでした。ヨゼフ様についてお話を聞かせて欲しいと尋ねた私に、本山さんは

## 桐谷多恵子

(長崎大学核兵器廃絶研究センター客員研究員)

「ヨゼフ様へのご恩返しができるなら」と涙を溜めて応えてくださいました。

しかしながら、「ヨゼフ様」への思いという多くのパトスが存在する中で、それを総合的にロゴスとして練り上げていく作業は困難を極めました。一人の人間を描くことで文化や復興を論じることが可能か悩み続けた筆者に、貴重なアドバイスをくださった研究者の先輩である福島在行さんにも心から御礼申し上げます。この3名のおかげでヨゼフ様を記録に残すこと、そして、論文として他者と共有できる議論へと成立させることができました。改めて感謝申し上げます。

次に、この賞をお受けした2点目についてお伝えしたいと存じます。それは、微力ながら今後国際文化学を背負って、研究と教育に取り組んでいきたいという決意表明であります。私を研究者として守り育ててくださったのは、まさに「国際文化学」でありました。

2005年に日本国際文化学会に加盟してから、今まで実にのびのびと学会で報告させていただきました。報告する度に、素晴らしいアドバイスを先生方や先輩、研究仲間から頂きました。その中で自分の研究を深められましたし、研究者として生きていく道が険しい中、心の支えにもなっていました。

日本国際文化学会は私にとって、大事な学会です。また尊敬する平野健一郎先生のお名前の付与された賞を頂戴できることはこの上なく光栄に存じます。正直なところ、私には身に余る賞でございますが、今回の受賞を機に、微力ながら国際文化学および、日本国際文化学会発展のために、一層尽力してまいります。日本国際文化学会において頂いたご指導の数々は、必ず、後世の研究者たちへ還してまいります。この度は、誠にありがとうございました。

●本「ニューズレター」にて連載中の「若手研究者紹介」に掲載を希望される方を募集します。お問い合わせは学会事務局までお願いいたします。

(学会事務局Eメール: [jsics@gr.tama.ac.jp](mailto:jsics@gr.tama.ac.jp))



# 事務局からのお知らせ

## 【2020年度の事業計画変更の件】

すでに学会ウェブサイト等でお知らせしておりますが、新型コロナウイルスの影響により、2020年度の事業計画に大幅な変更がありますので、改めてお知らせいたします。

- 5月予定の「理事選挙」が2021年度に延期となりました。
  - 8月23日～30日に予定されておりましたICCO短期集中セミナーが中止となりました。
  - 2021年7月に開催を予定しておりました香港大学での特別大会は中止となりました。
  - 今後の全国大会は、近畿大学(2021年度)、神戸大学(2022年度)、名城大学(2023年度)を予定しております。
- ※その他重要な変更事項は学会ウェブサイトにて掲載しておりますのでご確認ください。

## 【研究会募集のお知らせ】

研究会活動の企画運営にご活用ください。

- 申請金額:10万円まで(1～2件程度) ●申請締切り:随時 ●研究会の実施期間:2021年3月末まで
- 申請方法: 学会ウェブサイトより様式をダウンロードし、学会事務局宛に提出。
- 結果の通知:直近の常任理事会で決定し、結果をお知らせします。
- 研究会の実施については次の3点が条件。(1)共催として「日本国際文化学会」を明記する。(2)学会メンバーの研究・交流・発信活動を支援するものとし、非学会員の講演等が主となるような場合は、そこに学会メンバーも参加するプログラム(報告、対話、ラウンドテーブル方式による議論など、様式は自由)を用意する。(3)開催前に学会ウェブサイト及びニューズレターにおいて周知する。また開催後1ヶ月以内に400～800字程度の報告書を学会ウェブサイトおよびニューズレターで報告することとする。

## 【年報『インターカルチュラル』博士論文紹介記事の投稿を募集しています】

博士の学位を投稿締め切り日までに取得ないし取得確定したことを申告する会員は、年報の博士論文紹介欄に要約を発表することができます。入会申し込みと同時に投稿することもできます。

投稿原稿の書式:(1)会員氏名(英字表記を併記)、(2)専門分野・研究機関(在籍時)、(3)博士論文表題、(4)論文提出先ならびに提出年月日、(5)博士号取得ないし取得確定の年月日、(6)論文概要:日本語2,000字～2,150字(本誌2頁)の範囲でまとめてください。なお、文字数の調整をお願いすることがあります。

- 投稿締切日:2020年11月 著者による初校・再校を実施します。●掲載予定誌『インターカルチュラル』第19号(2021年3月刊行予定) ●問合せ:年報編集委員会宛 editorialboard.intercultural@gmail.com

## 【会費納入のお願い】

- 2020年度の会費納入がまだの方は、お振込みをお願いいたします。
- 2019年度以前に未納されている場合は、学会事務局までご一報ください。
- 事務局移転に伴い、2021年度分より年会費納入口座が変更となります。

- 学会会費(4月～翌3月末までの年度会費額)
- 正会員 10,000円
- 大学院生 5,000円
- 学部生 2,000円(学会誌は別途購入)

### 【振込先口座番号】

ゆうちょ銀行 00210-2-138408  
日本国際文化学会

※平成25年度総会により、年会費(10,000円)の支払いに困難を覚える者は、常任理事会宛に会費の減額(5,000円)を申請できることとなりました。希望者は、学会事務局まで理由書をご提出ください(書式自由)。

会費の未納・滞納は、学会運営に大きな支障をきたします。何卒ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

※他行等からの振込先口座番号は下記のとおりです。恐れ入りますが、振込手数料はご負担ください。

ゆうちょ銀行  
店名:〇二九(ゼロニキユウ)店(029)  
当座 0138408

## 【事務局移転のお知らせ】

会員の皆様

2021年3月31日をもちまして日本国際文化学会の事務局は多摩大学グローバルスタディーズ学部から龍谷大学様に移転致します。今後、通常業務に支障が起きないよう細心の注意を払いながら残り6ヶ月間努力させていただきます。会員の皆様の要望や業務に関して何かございましたら遠慮せずに連絡して頂ければ幸いです。

《事務局長:安田震一》